# 円空の彫刻芸術（5）ー関東の不動明王坐像

The Sculptural Art of Enkū (5) — The Statues of Fudō-myō-ō in the Kantō Region

野村　幸弘
Yukihiro Nomura

## はじめに

円空は30歳代の初め、1666（寛文6）年から約2年間、東北・北海道の旅に出て、おもに十一面観音立像と観音菩薩坐像を旅先に残している。(1) そのように遠方へ赴き、比較的長期にわたった旅がもう一度ある。それは、1680（延宝8）年から約3年間、円空が40歳代の終わりに滞在した関東への旅である(2)。

円空が関東に滞在していたことを示す記録は３つある。ひとつ目は茨城県笠間市、月崇寺の《観音像》の背銘「萬山護法諸天神　御木地土作大明神　延宝八年庚申秋　観世音菩薩　九月中旬」である。(3) 二つ目は群馬県富岡市の貫前神社にあり、現在、千葉県の芝山はにわ博物館所蔵になる「大般若経奥書」に「十八年中動法輪　諸天晝夜守奉身　刹那轉讀心般若　上の一ノ宮今古新　いくたひもめくれる法ノ車ニソ一代蔵モ輕クトドロケ　延宝九年辛酉　卯月丁酉十四日辰時見終也　壬申年生　美濃國　円空」と書かれている。(4) そして三つ目は栃木県鹿沼市の広済寺にある《千手十一面観音像》の背銘「伝燈沙門高岳法師　天和二戌九月九日　釈円空刻之」である。

これらの記録から、円空が1680（延宝8）年9月に茨城、1681（延宝９）年に群馬、1682（天和２）年に栃木にいたことが分かる。この期間に円空は精力的に作像したと思われるが、現在、関東で確認されている円空仏は、約200体で、その約8割が埼玉に集中している。(5) そこから円空がもっとも長く滞在したのは埼玉だったにちがいなく、そこを拠点に周辺の群馬、栃木、茨城にも足を延ばしたのではないかと推測できる。そこでの造像活動で特徴的なのは、初期の東北・北海道への旅とは異なり、不動明王像を数多く制作していることである。(6) 本稿では、そのなかでも円空の不動明王の「坐像」を取り上げ、関東へ行く以前、関東滞在時、関東から美濃に戻った後、それらがどのように様式を変化させたのか、そのプロセスを辿ってみたい。

## 美並町の不動明王坐像

関東の旅に出る直前の1679（延宝7）年に、円空は不動明王坐像を2体、岐阜の美並町で制作している。ひとつは美並町下田の愛宕社（**図1**）に、もうひとつは美並町杉原の熊野神社（**図2**）に伝わるものである（現在は２体とも美並町ふるさと館所蔵）。それぞれ像高52cmと42ｃｍの坐像で、背面に墨書がある。美並町下田・愛宕社の不動明王坐像背面には、「白山神詫曰　是有廟　即世尊　千完滝　延宝七巳未暦六月十五日　円空」、美並町杉原・熊野神社の不動明王坐像背面には「白山神申日　是在廟　即世尊　千多羅滝　延宝七巳未暦六月十五日　円空沙門」と書かれている。「詫」と「申」、「有」と「在」、「千完滝」と「千多羅滝」以外は同じ文言で、日付もまったく同じである。「詫」は「託」で、「千完」は「千多羅」から類推すると、「千虎」と読める。延宝七(1679)年6月15日、円空は白山神から「ここに祠がある。それがすなわち釈尊である」との託宣を受けたという意味だろう。「千多羅滝」は美並町の北に隣接する相生町千虎の「法伝の滝」だと推定されており(7)、円空はそこでの滝行によって、白山神から託宣を受けるという神秘的な宗教体験をしたにちがいない。とすれば、延宝七（1679）年6月15日は、彼にとって非常に重要な意味を

図1　円空《不動明王》
1679年　郡上八幡
市美並町下田
愛宕社

図2　円空《不動明王》
1679年　郡上八幡
市美並町杉原
熊野神社

持つ日となったことは想像に難くない。この日付は、これら２体の不動明王坐像のほか、法伝の滝のそばに建つ千虎不動堂の不動明王立像と、美並町杉原・熊野神社の十一面観音像（美並町ふるさと館所蔵）の背面にも墨書されていることから、そのことが窺える。

ところが、２体の不動明王坐像をくらべると、様式が異なっているため、同じ日に完成させたとは考えにくい。円空が白山神の宣託を受けたのは６月 15 日なのだろうが、２体の不動明王坐像は、同じ宣託日が背面に記されているものの、それぞれその後、異なる時期に制作されたと考えるべきだろう。

まず両者の顔を比較すると、下田・愛宕社の方が杉原・熊野神社よりも丸く、頬から顎にかけてかなり肉厚となっている（**図３・図４**）。また羂索を胸元に持つ左手に注目すると、下田・愛宕社では広く布で覆われているかのように手の形がまったく見えないが、杉原・熊野神社では指先から手首までのシルエットがはっきりと出ている。つまり羂索を布というより縄として表そうとしているのである。

一方、右手に持つ宝剣は、側面から見ると、その位置が異なっているのがはっきりと分かる（**図５・図６**）。下田・愛宕社の不動明王が、宝剣を耳のあたりを覆っているのに対して、杉原・熊野神社ではこめかみにぴたりと付けている。

こうした様式のちがいから、両者の制作時期の前後関係を導き出すことができると思われる。というのも、おそらく 1679（延宝７）年以前に制作された名古屋の荒子観音や羽島の中観音堂、同じく羽島の徳林寺にある不動明王の顔の形はいずれも丸く、下田・愛宕社のものに近い。杉原・熊野神社のように角張ってはいないのである。そして杉原・熊野神社のように、縄状の羂索を持ち、宝剣を耳ではなく、こめかみに付けるタイプの不動明王像は、1680（延宝８）年以降の関東における不動明王像のいずれにも当てはまる特徴なのである。とすれば、美並の２体の不動明王のうち、下田・愛宕社のものが先で、その後、杉原・熊野神社のものが制作され、そうした様式上の特徴が関東における不動明王像へと引き継がれていったと考えられるだろう。

それでは、下田・愛宕と杉原・熊野神社の不動明王像の間には、どれくらいの時間的間隔があったのだろうか。その手掛かりは、郡上市白鳥町・三輪神社の不動明王坐像（**図７**）に求められる。この不動明王坐像は、下田・愛宕社同様、左手がいまだに布に覆い被さって指は表されていないものの、顔の形はすでに矩形に変わり、宝剣は耳元ではなくこめかみに付けられている。これは杉原・熊野神社の不動明王の特徴と一致する（**図７・図８**）。しかも両像はそれぞれ像高 42cm と 44cm と、ほぼ同じ大きさであり、これらはそれほど時を隔てず作られたものと思われる。したがって郡

図３　円空《不動明王》（部分）
美並町下田　愛宕社

図４　円空《不動明王》（部分）
美並町杉原　熊野神社

図５　円空《不動明王》（部分）
下田　愛宕社

図６　円空《不動明王》（部分）
杉原　熊野神社

図７　円空《不動明王》
1679 年　郡上市
白鳥町　三輪神社

図８　円空《不動明王》
1679 年　郡上八幡市
美並町杉原　熊野神社

上市白鳥町・三輪神社の不動明王坐像は、美並町下田・愛宕神社と杉原・熊野神社の、ちょうど中間的で過渡期的な様式を持っていると言えるだろう。とすれば、同じ日付をもつ美並町の2体の不動明王坐像制作の間に、円空は北上して白鳥町・三輪神社でもう一体の不動明王坐像を彫っていたことになる。同じ日付をもつ美並町の2体の不動明王坐像の間には、白鳥町往復の期間があったと考えられ、そこには数週間ほどの間隔があったと推定できるだろう。

美並町下田・愛宕社から白鳥町・三輪神社へ、そして再度、美並町に戻って杉原・熊野神社へと彫り進み、次に制作したのは、おそらく関市・円福寺の不動明王坐像（**図11**）だと思われる。というのは、杉原・熊野神社では手先が布、あるいは縄にすっぽりくるまれていたが、円福寺では羂索が親指、人差し指の間でしっかり握られているところが表されているからである。つまりここでようやく円空は羂索を握るという表現を獲得したのである。

左手がどのように表現されているかを、下田・愛宕社から円福寺までの4体の不動明王坐像でくらべてみると、その様式上の変化、発展をはっきり確認することができる（**図9-a～図9-d**）。

左手全体をすっぽり覆っていた布状の広い羂索（**図9-a**）の幅がやや狭まり（**図9-b**）、手首と手の輪郭が表れ始め（**図9-c**）、さらに親指と人差し指がもはや布ではなく、縄状のものを摑んでいるところが表される（**図9-d**）ところまで彫り出されて行く、その様式的展開が見てとれるのである。

図9-a 美並町下田 愛宕社

図9-b 白鳥町 三輪神社

図9-c 美並町杉原 熊野神社

図9-d 関市 円福寺

図10 円空《不動明王》（部分） 富岡市 妙義神社

## 関東の不動明王坐像

次に検討しなければならないのは、円空は岐阜からどのようなルートを辿って関東入りしたのかという問題である。想定されるルートは東海道と中山道のどちらかだろう。円空に富士山や箱根、江戸を詠んだ歌があることから、東海道を通って関東へ赴いたとする説があるが、東海道沿いに円空仏はほとんど残されていない。(8) 一方、中山道を通って群馬から埼玉に入ったと考えるとどうだろう。中山道の街道筋にある松井田宿の西南にある妙義山は、関東地方における山岳信仰の対象であり、修験道の修行の場であった。(9) この妙義山の東側の中腹に妙義神社があり、じっさい、そこには現在でも円空が彫った不動明王坐像が1体残されている。これを、円空が関東への旅に出る直前に制作した岐阜県関市の円福寺にある不動明王坐像とくらべてみたい。

羂索を胸元で握る左手の形と位置、左肩にかかる衣の襞、額や眉毛、宝剣を右のこめかみに当てているところなどに、著しい類似が認められる（**図11・図12**）。さらに、関市・円福寺と富岡市・妙義神社の不動明王坐像の、今度は左手をアップにした写真をくらべてみよう。その羂索を握る親指と人差し指の形に注目すると、両者の様式はきわめて近いと判断できるだろう（**図9-d・図10**）。

図11 円空《不動明王》 1679年 関市 円福寺

図12 円空《不動明王》1679-80年 群馬県富岡市 妙義神社

また妙義神社の不動明王坐像を側面から見ると、上

半身がやや前傾しているため、頭部から臀部にかけて背面が斜めになっているが、これは、美並町杉原・熊野神社の不動明王像のシルエットとほぼ重なり合う（**図 13・図 14**）。したがって岐阜と群馬の両像の制作時期はかなり近接していると考えられる。これら２体の不動明王坐像が様式上、密接につながっているとすれば、円空が東海道ではなく、中山道経由で関東入りした可能性の方が高いと言えるだろう。

**図 13　円空《不動明王》 1679 年　郡上八幡市美並町杉原 熊野神社**

**図 14　円空《不動明王》1679-80 年　群馬県富岡市　妙義神社**

円空は 1679 年に美並町や関市の円福寺で不動明王坐像を彫った後、岐阜から長野を通って群馬に入ったとしたら、群馬県富岡市・貫前神社の「大般若経奥書」に延宝九（1681）年の銘を残したのは、おそらく２度目の群馬滞在時だったことになる。延宝八（1680）年９月には、茨城の月崇寺で観音菩薩像を制作しているので、最初の群馬滞在はごく短いものだったと考えられる。

群馬から埼玉に移動した後、円空は数多くの不動明王坐像を手掛けているが、それらは様式上の特徴によって大きく２つのグループに分類することができる。ひとつは今述べた、群馬の妙義神社にある不動明王坐像の様式的特徴を引き継ぐもので、久喜市・幸福寺（久喜市郷土資料館所蔵）、幸手市・個人蔵、越谷市・西福院、さいたま市・正福寺、さいたま市・薬王寺、さいたま市・地蔵院（さいたま市立博物館所蔵）の各不動明王坐像がそれにあたる。ここではこれを便宜的にＡグループと呼ぶ。

もうひとつは、これらＡグループとは異なる特徴を示し始めたもので、蓮田市・個人蔵、さいたま市・個人蔵、加須市・大聖院、さいたま市・不動院（焼失）、越谷市・個人蔵、春日部市・個人蔵、春日部市・香林寺、日光市・輪光寺の各不動明王坐像が属する。これらに共通する特徴は、右手に持つ宝剣に鍔（つば）が表されていることである。これをＢグループとする。

以下、これら２つのグループの様式的特徴のちがいを、とくに右手に持つ宝剣、羂索を握る左手、顔、額、頭髪、などの細部に注目して、明らかにしてみたい。

**Ａグループ**

| | | |
|---|---|---|
| 群馬県富岡市 | 妙義神社 | （図 15-a） |
| 埼玉県久喜市 | 幸福寺 | （図 15-b） |
| 埼玉県幸手市 | 個人蔵 | （図 15-c） |
| 埼玉県越谷市 | 西福院 | （図 15-d） |
| 埼玉県さいたま市 | 正福寺 | （図 15-e） |
| 埼玉県さいたま市 | 薬王寺 | （図 15-f） |
| 埼玉県さいたま市 | 地蔵院 | （図 15-g） |

**Ｂグループ**

| | | |
|---|---|---|
| 埼玉県蓮田市 | 個人蔵 | （図 16-a） |
| 埼玉県さいたま市 | 個人蔵 | （図 16-b） |
| 埼玉県加須市 | 大聖院 | （図 16-c） |
| 埼玉県さいたま市 | 不動院 | （図 16-d） |
| 埼玉県越谷市 | 個人蔵 | （図 16-e） |
| 埼玉県春日部市 | 個人蔵 | （図 16-f） |
| 埼玉県春日部市 | 香林寺 | （図 16-g） |
| 栃木県日光市 | 輪王寺 | （図 16-h） |

**細部の比較**

今回、調査を行った円空による 15 体の不動明王坐像を、宝剣に鍔（つば）が表されているかどうかによって、上記のように鍔のないＡグループ７体、鍔のあるＢグループ８体に分けてみた。円空が関東を旅する前に美並町で制作した不動明王坐像の宝剣には鍔がないことから、群馬県、妙義神社の不動明王坐像をはじめとする鍔のないＡグループが関東での最初の作例で、その後、円空は埼玉のどこかの時点で、鍔の部分を彫るようになったと考えられる。その理由は分からないが、埼玉での修験道者との交わりのなかで新たに得た不動明王に関する知識によるものだったのかもしれない。いずれにしても、鍔のある宝剣を持つ一連の彫像を、ここではまとめてＢグループとする。まず、このように２つのグループに分けると、不動明王坐像のその他の部分の表現も、それぞれ互いに異なる特徴を持っていることが判明する。

Aグループ

図 15-a　図 15-b　図 15-c　図 15-d　図 15-e　図 15-f　図 15-g

Bグループ

図 16-a　図 16-b　図 16-c　図 16-d　図 16-e　図 16-f　図 16-g　図 16-h

まず左手の表現に着目すると、Aグループでは、鋭角的に肘を曲げ、左胸の前で親指と人差し指をこちらに見せて羂索を握っているのに対して、Bグループでは、肘を横ではなく後方に引き、ダンベルでも扱っているみたいに、手の甲を左肩まで挙げている。もっとも左手の表現は、AグループからBグループへと急激に変化するわけではなく、Bグループ初期の埼玉県蓮田市・個人蔵（**図 16-a**）、さいたま市・個人蔵（**図 16-b**）の不動明王坐像では、Aグループの型をまだ若干、残している。右手に持つ宝剣の鍔が表されるのと同時に、左手の表現が急激に変化したわけではない。左手の表現がBグループの加須市・大聖院の不動明王坐像（図 16-c）から少し変化の兆しを見せるのは、円空が木材のどの面を彫るのかという技法上の関係があるからである。

Aグループ　　Bグループ

図 15-b の側面　図 15-d の側面　図 15-f の側面　図 15-g の側面　図 16-c の側面　図 16-g の側面　図 16-h の側面

側面から撮影した彫像を見ると、Aグループでは丸太を縦に割った柾目面を正面にして、浅浮彫のように彫られているのが分かる。そして樹皮に近い辺材の湾曲した部分が背面となっている。一方、Bグループではその逆で、柾目面を背面とし、出っ張った辺材側を正面にして彫っている。その結果、Aグループでは左腕のシルエットが見えないが、Bグループでは左腕がしっかりと前に突き出てているのが分かる。また、Aグループの中でも、肩・肘・

大腿部・岩座の彫りが幸福寺では浅く（**図 15-b の側面**）、その彫りが徐々に深くなって、地蔵院では前腕と二の腕が側面からでもはっきり確認できるほどまでになっている（**図 15-g の側面**）。つまり正面からだけでなく、側面からも見られることを意識した彫り方となっている。その意識がＢグループではさらに強まっているのである。加須市・大聖院、春日部市・香林寺、日光市・輪王寺の不動明王坐像では、Ｖ字型に曲げた腕と、拳（こぶし）を顎のあたりまで突き上げているところが、側面からはっきりと見えるように彫られている（**図 16-c・16-g・16-h の側面**）。

彫像の底面の写真を見ると、Ａグループでは底部の断面がきれいな半円形となっており、Ｂグループでは背面が平坦になっているのが確認できる。このように円空は木材のどの面を正面にして彫るのかに関して、関東滞在の初期から後期へと異なる２の方法を取っていたことが分かる。

円空の彫像が保存されている状態によって、彫像の側面、および底面の撮影ができないもの、あるいは個人の所有物で調査の許可が下りなかったものがあるが、少なくともここに掲載したＡグループ４体、Ｂグループ３体の計７体の側面写真、およびＡグループ２体、Ｂグループ２体の計４体の底面写真からは、以上のようなことを導き出すことができるだろう。今後、他の不動明王坐像の側面・底面写真の撮影ができれば、円空の技法上の変化をよりいっそう明確にすることが期待できる。

**Ａグループ**　　**Ｂグループ**

正面

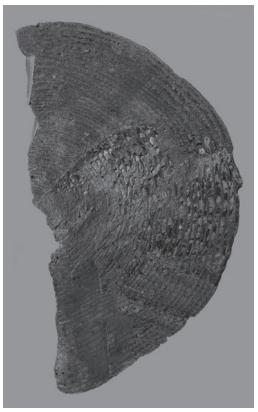

**図 15-b の底面**

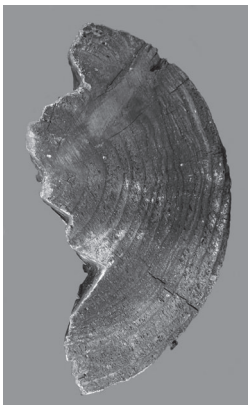

**図 15-d の底面**

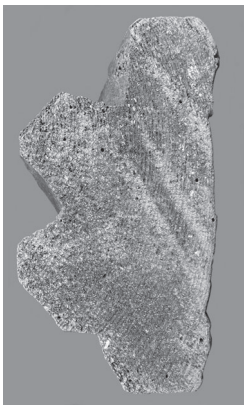

**図 16-c の底面**

**図 16-h の底面**

背面

羂索を持つ左手の表現は、平面的な彫りから、徐々に立体的になって行く傾向にあったが、宝剣を持つ右手の方は、大きな変化は見られないものの、鍔の有無がＡ、Ｂ、２つのグループに分ける際の重要な指標になり得るだろう。鍔のあるＢグループ８体の右手の細部写真を並べて比較すると、非常に細かな差異ではあるが、やはり鍔の意匠に変化が認められる。

Ｂグループ

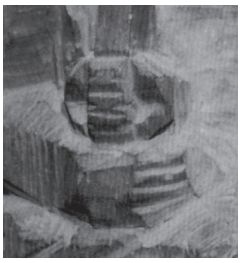

**図 16-a の右手**

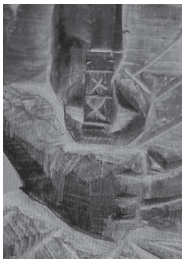

**図 16-b の右手**

**図 16-c の右手**

**図 16-d の右手**

**図 16-e の右手**

**図 16-f の右手**

**図 16-g の右手**

**図 16-h の右手**

まず宝剣の鍔に×印が上下に２つ付いているのが、B グループ初期の蓮田市・個人蔵（**図 16-a の右手**）、さいたま市・個人蔵（**図 16-b の右手**）、加須市・大聖院（**図 16-c の右手**）の３体。その後は×印が１つになる。そして埼玉県さいたま市・不動院（**図 16-d**）、越谷市・個人蔵（**図 16-e**）、春日部市・個人蔵（**図 16-f**）、春日部市・香林寺（**図 16-g**）、日光市・輪王寺（**図 16-h**）では、鍔の形が扁平になっているのが分かる。このように、A グループでは、**図 15-a** から g まで、B グループでは、**図 16-a** から h までの順序で、少しずつではあるが、円空は細部の表現を変化させているのである。

A グループ

図 15-a の顔

図 15-b の顔

図 15-c の顔

図 15-d の顔

図 15-e の顔

図 15-f の顔

図 15-g の顔

B グループ

図 16-a の顔

図 16-b の顔

図 16-c の顔

図 16-d の顔

図 16-e の顔

図 16-f の顔

図 16-g の顔

図 16-h の顔

最後に、顔の表現だが、そこにはどんな変化が認められるだろうか。A グループでもっとも特徴的なのは、斜めに深く刻まれた線状の頭髪表現である。それに対して、B グループの頭髪は松毬（かさ）のようにブロック状になっている。ただ例外的に A グループでは薬王寺のものがややブロック状になっており、B グループでは加須市・大聖院のものが線状となっている。したがって A グループの後期と B グループの初期は、A から B へと移る過渡期的な様式を示していると言える。また A グループでは、額に横長の皺が比較的大きく刻まれているが、B グループでは額の皺は

あまり目立たない。それ以外はA、B両グループとも、顔の表現についてはそれほど際立った変化は認められない。ただ、もう少し細かく見てみると、さいたま市・個人蔵とさいたま市・不動院のもの（**図16-b・図16-d**）は、その眉の表現が似ているため、両者の制作時期はかなり近いと考えられる。また春日部市・香林寺と日光市・輪王寺のものをくらべると（**図16-g・図16-h**）、丸い顔の輪郭や切れ長の目などがよく似ているため、これらもやはり同じ制作時期とみていいだろう。

**図17　円空《不動明王》**
**岐阜市　円空美術館**

**図18　円空《不動明王》（焼失）**
**さいたま市　不動院旧蔵**

**図19　円空《不動明王》（部分）**
**岐阜市　円空美術館**

**図20　円空《不動明王》（部分）**
**さいたま市　不動院旧蔵**

**図21　円空《不動明王》（部分）**
**岐阜市　円空美術館**

**図22　円空《不動明王》（部分）**
**埼玉県加須市　大聖院**

**図23　円空《不動明王》**
**三重県伊勢市　法住院**

**図24　円空《不動明王》**
**岐阜市北方町　円鏡寺**

## 「関東様式」の不動明王坐像

以上、見てきたように、1679年の岐阜県美並町の不動明王坐像の様式が、群馬、埼玉、栃木での作像に受け継がれて行く過程で、少しずつ連続的に変化していることが明らかになった。この「関東様式」の不動明王坐像の特徴は、じつは関東地方以外の他の場所で保管されている彫像にも認められる。たとえば､現在、岐阜市の円空美術館の所蔵となっている不動明王坐像（**図17**）は、以前は福岡県飯塚市の個人蔵であり、これは九州で確認された唯一の円空仏だった。にもかかわらず、この彫像ははっきりと「関東様式」を示しているのである。したがって、関東から遠く離れた九州で、円空自身が「関東様式」の彫像を制作した可能性はきわめて低いと考えざるを得ないだろう。

まず、この不動明王坐像は、宝剣に鍔があり、羂索を持つ手が左肩のところで拳を握っているので、明らかに「関東様式」のBグループに属している。そして上衣の円弧状の裾が下衣の上に載るという衣襞の表現が、さいたま市・不動院のものとほぼ同一である（**図17・図18**）。

また、両者では宝剣の鍔、右手の甲と指の表現が同一である（**図19・図20**）。やや異なるのは、顔や眉、頭髪の表現である。とくによく目立つ頭髪に注目すると、円空美術館の不動明王坐像は、Aグループの特徴を持っているのが見てとれる。Bグループに属する不動院の松毬状の頭髪にはまだなっていないのである。こうした頭髪や顔の表情などについては、むしろ加須市・大聖院の不動明王坐像に近い（**図21・図22**）。頭髪の他にも、眉間に向かって斜めに集まる深い刻線、三角錐状の鼻が酷似している。したがって、円空美術館所蔵の不動明王坐像の制作時期は、加須市・大聖院とさいたま市・不動院の間に位置づけていいだろう。

もう1体、「関東様式」を示している不動明王座坐像が、最近、伊勢市・法住院で発見された（**図23**）。(10) 宝剣はないものの、左手の甲をこちらに見せているので､「関東様式」のBグループの特徴を示している。もともと関東で制作されたものが、何らかの事情で伊勢に運ばれたのか、あるいは、関東から戻った後、円空が1674年に次いで2度目に伊勢に行って造像した

のかは分からない。高さ 11.8cm、幅 6.4cm の小さな像なので、関東から伊勢にもたらされた可能性は十分にあると思われる。

「関東様式」の不動明王座坐像は、円空が岐阜に戻ってから制作した彫像にも認められる。それが岐阜市北方町、円鏡寺の所蔵になるものである（**図 24**）。頭髪は松毬状で、羂索を持つ左手は肩を超え、頬のあたりまで持ち上げられている。宝剣の鍔が表されているので、これらの特徴はすべて「関東様式」の B グループと一致する。したがって、円鏡寺の不動明王坐像は円空が関東への旅から戻ってまもなくの 1682 年頃の作ということになるだろう。円空が約 3 年間の関東滞在時に制作した不動明王坐像の特徴を、以上のように明確化することで、その前後の円空によるいくつかの彫像の制作時期をかなり絞り込むことができた。本稿では、不動明王の坐像を検討し、立像は除外した。立像は坐像とはまた異なった様式の展開をしており、それについては、坐像とは別個に、関東以前と以後の作例との様式的なつながりを明らかにする必要があるだろう。

**註**

(1) 拙論「東北・北海道における円空の旅路」『円空研究』33、2019 年、27-36 頁、拙論「円空の彫刻芸術（３）―東北・北海道の十一面観音像」『岐阜大学教育学部研究報告－人文科学』第 68 巻、第 2 号、2020 年、85-94 頁、拙論「円空の彫刻芸術（４）―東北・北海道の観音菩薩像」『岐阜大学教育学部研究報告－人文科学』第 69 巻、第 2 号、2021 年　75-83 頁を参照。

(2) 長谷川公茂「円空の関東巡錫の期間」『円空研究』24、2001 年、20-26 頁。長谷川によれば、円空の関東滞在は、最短で 2 年、最長で約 4 年半である。

(3) 月崇寺の《観音像》の背銘にある「御木地土作」をどう読むかについて、解釈が分かれている。五来重によれば「御木地土作」の「土」は「士」と読めるので、木地士が作ったとする。ここから円空の出自を美濃の木地師とする説が出されている（五来重「野性と庶民宗教の芸術―円空仏」『野性の芸術・円空展』朝日新聞社、1980 年、161-175 頁）。木地師説に対する反論については、以下を参照。長谷川公茂「円空の生涯」『円空―慈悲と魂の芸術展』図録、朝日新聞社、1994 年、209-221 頁、梅原猛『歓喜する円空』新潮社、2006 年、111-116 頁、小島梯次『円空・人』まつお出版、2021 年、15-19 頁。

(4) 貫前神社旧蔵「大般若経奥書」には「壬申年生　美濃國」と書かれ、生年と出生地（寛永 9（1632）年、美濃）が明記されている。18 年にわたって仏法を伝え護ってきたと書いているので、延宝 9（1681）年から 18 年を引くと、その開始が寛文 3（1663）年となる。おそらく円空はこの年から造像活動を始め、仏像制作が布教活動の起点になったと考えられる。つまり彼の芸術活動と宗教活動はぴったり軌を一にしていたことになる。また、1681 年 4 月 14 日午前 8 時ごろに大般若経を読誦し終えたと記していることには、円空の篤い信仰心が感じられる。

(5) 織本重道「埼玉の円空」『円空研究 2』円空学会編、人間の科学社、2004 年、94-96 頁。

(6) 円空の関東滞在の目的は、不動院（埼玉県春日部市小渕）の本尊である不動明王像制作のためだとする説が出されている（小島梯次「円空の関東巡錫の目的について」『円空研究』20、2006 年、60-67 頁）。

(7) 池田勇次「郡上郡の円空」『円空研究 5』円空学会編、人間の科学社、2004 年、98-112 頁。

(8) 梅原（前掲書、303 頁）は、東海道を通って「まずは埼玉に行って多くの像を作り、後に茨城、群馬などに行き、最後に日光に長く滞在したと考えるのがよかろう」としている。小島もまた、どちらかと言えば、東海道ルートの方を支持しているようだ（小島梯次『円空・人』まつお出版、2021 年、54 頁）。

(9) 池田秀夫「群馬県における円空上人」『円空研究 2』円空学会編、人間の科学社、2004 年、77-82 頁。

(10) 2022 年 6 月 4 日、伊勢市、不断寺での円空仏調査の際、伊勢市文化政策課の山本翔麻氏から法住院で円空作と思われる不動明王座坐像が発見されたと聞き、同氏の案内で不断寺を訪れ実見したところ、その様式的特徴から円空作であると判断した。

**図版出典**

図１・２・３・４・５・６・８・13　郡上市提供。

図７・9b・9d・10・11・12・14・15a・15b・15d・15g・16c・16g・16h・22・23　筆者撮影

図 15c　幸手市郷土資料館提供。

図 15e・16a・16b・16e・16 f　『特別展　円空　こころを刻む―埼玉の諸像を中心に―』埼玉県立歴史と民族の博物館　2011 年、35 頁。

図 15f・17 ・19・21　前田邦臣氏撮影。

図 16d ・18 ・20　織本重道氏提供。

図 24 『特別展　東海地方の円空仏　その造形と足跡をたどる』岐阜県博物館　2016 年、38 頁。

調査・写真撮影を許可していただいた以下の所有者、管理者の方々に厚く御礼申し上げます。
岐阜：円福寺・三輪神社、群馬：妙義神社、埼玉：さいたま市立博物館・幸手市郷土資料館・大聖院・西福院・香林寺、栃木：輪王寺。

＊本研究は、科学研究費の助成による基盤研究Ｃ「円空彫刻の全作品カタログの作成」（課題番号　16K02264）の成果の一部である。